

語彙の国際化と国際共通語彙  
 ——言語間語彙論の諸問題について——

Lexikalische Internationalisierung und Internationalismen<sup>(\*)</sup>  
 ——Probleme der Interlexikologie——

田中宏幸  
 Hiroyuki Tanaka

- 1 国際化時代の言語 Sprachen im Zeitalter der Internationalisierung
  - 2 言語間語彙論研究の理論と方法 Theorie und Methode der Interlexikologie
  - 3 ヨーロッパにおける国際共通語彙 Internationalismen in Europa
  - 4 日本語と国際共通語彙 Internationalismen und Japanisch
  - 5 その他の問題点と展望 Andere Fragen und Ausblick
- 引用・参考文献 Bibliographie

今日ますます盛んになってきた世界諸地域の国際的な交流は、外交・政治・経済などの分野にとどまらない。この相互コミュニケーションの手段として、言語は不可欠であるが、言語は単なる情報伝達手段ではなく、文化と密接な関連の上に形成され、また、その文化の形成者でもあり、それぞれの文化のレベルに深く関わっているから、異なる文化圏の人々の国際的な相互理解は必ずしも容易ではない。そこで使用される言語は、元来情報伝達・相互理解のために理想的な状態にはない。こうした言語に関する諸問題は多数の研究者により観察・分析され、いろいろ解決が試みられている。言語接触論・言語類型論的な分析も試みられているが、特に近来、外国語学習との関連で諸言語のコントラスト *Kontrast* すなわち差異に焦点が当てられ、いわゆる対照言語学的観点から、干渉・障害・障壁が多く話題にされてきた。その際、その比較対照は主として母語と外国語の2言語間で行われるのが普通であった。しかし現代においては、他方で諸言語間の共通面も注目されよう。それは周知の如く、相互交流の結果として、現代の世界諸地域の様々な生活様式・文化領域で国際的な共通化が進んでいて——政治・経済、科学技術、スポーツ、音楽、映画、流行、ツーリズムなど——これは当然、言語に反映されざるをえないからである。このような共通面は、とりわけ語彙の領域で顕著である。この分析は母語と外国語というレベルを越えて、国際的な諸言語間のレベルで比較されることになる。今日このような言語間の比較研究分野に対し「言語間言語学」*Interlinguistik*、「言語間語彙論」（国際共通

\*Kontakt: Prof. H. Tanaka, Department of German, Kanazawa University, Marunouchi 1-1, KANAZAWA/Japan

語彙論) *Interlexikologie* という名称が提唱されている。恐らくこれに平行して「言語間語彙記述論」(国際共通語辞書編纂) *Interlexikographie* が、このような観点からの辞書を編纂することになる。(1)

以下はこのような観点から、現代の言語事情を概観するものであるが、国際交流・外国語学習・翻訳等の応用分野の参考となることを期待している。

## 1 国際化時代の言語

現代世界諸地域の国際的な接触・交流は、かつて予想もできないくらいに進展し、もはや一部専門家のものでなく一般人も関わるようになって久しい。政治的国境が次第に形骸化し、人々は国際的に自由に往来可能となり、かつては思いもよらなかったような次元での接触・交流が実現している。この場合コミュニケーションのための言語の問題が生じてくる。2言語接触の場合は、どちらか一方の言語で、あるいは相互補完的に交流が可能であるが、多様な言語と文化の接触・交流には当然、すべての場合に相互に容易に理解できる共通の言語手段が望まれるであろう。この言語手段として十九世紀以来次第に頭角を顕し、第二次大戦後はますます優勢となった英語が、今日、世界の国際交流の共通語としての役割を担うに至っている。しかし英語は文法が単純化しているとはいえ、スペルと発音の関係は複雑極まりないものであり、これ以外の文法領域・語彙体系も、英米文化と密接に関わる言語であり、他の文化圏の所属員には必ずしも容易に使用できるものではない。それはまた母語として習得した人々とのハンディキャップが大きいという欠点にも通ずるものである。もっとも科学・技術の分野の研究の方法や対象の共通性は高く、その専門術語のレベルでは特定地域文化への依存はほとんど考えられない。しかし英語らしい英語の語法から全く離れることは不可能であろう。少なくともオフィシャルな国際交流の場では、そのような英語が要求されている。

ところで、このような共通語は、元来あらゆる言語集団に属する人々が、ほぼ同等に容易に習得できる単純明快な音韻構造、合理的で普遍的な文法規則、記憶が容易な基本語彙、合理的な語構成法を備えていなくてはならない。そして本質的に特定の文化に依存しない中立的なものでなくてはならないであろう。残念ながら目下のところ、このような要求・条件を満たす共通語は存在しない。あえていえば比較的発音が容易で、かなり合理的で明快な文法・語彙をもつ人工語のエスペラント *Esperanto* が、なおヨーロッパ諸語に依存し

(1) WANDRUSZKA, *Interlinguistik*; VOLMERT, *Interlexikologie*, その他 INTERNATIONALISMEN 所収の諸論文参照。なお *Interlinguistik* は「国際補助語研究」の意で用いられることもある。以下文献の引用は原則的には著者名によるが、必要に応じてタイトルの一部または出版年を補う。一部はタイトルのみで、また略語で引用したが「引用・参考文献」のリストを参照されたい。S. はページ, f., ff. は次ページ, 次ページ以下を示す。

てはいるが、ヨーロッパの各言語からの中立性という点でも優れていて、現段階ではかなり成功している。もし国際的に共通補助語として認められれば、十分にその役割を果たすことが可能である。もちろん諸外国語の学習の必要度・重要性は、本質的には、それによって減少するものではないが、それは一部——例えば様々な専門分野で10パーセント程度——のエキスパートに委ねるのがいい。一般的にはこの学習容易な補助語に専念し、諸外国語学習は最低限必要な程度にとどめ、これまで際限なく注がねばならなかったエネルギーを、それぞれ他に転換するのが上策であろう。しかし遺憾ながら現実的には、このような提案は、すぐには一般的に受け入れらると思われない。

ここで現代の国際的交流に関わる諸言語の現状を展望すると、当然のこととはいえ、接触・交流の結果、少なくとも語彙の領域ではかなりの共通化ないし国際化が起こっている点が注目される。「ヨーロッパのどこかで外国語の新聞を手にとると、至る所で、少し形は変わっているが馴染みの語や文に出会い、なにかほっとする。こんな事がなければその言葉については全くなんの手掛かりもないのであるが。」これは『言語間言語学』<sup>(2)</sup>で知られている対照比較言語研究家ヴァンドゥルシュカの『ヨーロッパ言語共同体』Die europäische Sprachengemeinschaft (S. 7)の冒頭の言葉である。もし日本語の新聞もローマ字で印刷されていれば、ヨーロッパの諸言語ほどではないにしても、ヴァンドゥルシュカは、かなりの「少し形は変わっているが馴染みの語」を日本の新聞でも見付けることであろう。もっとも、少し日本語が分かればカタカナによって、むしろ、より簡単に見付かるかもしれない。

他方、似たような経験は、漢字使用の諸言語間でも推定される。すなわち、音声は分からなくても、漢字の性質上、しばしば意味の見当がつくということがあつてはなからうか。かつての漢文の読み下し文はユニークなケースであろう。

ところで、ここで見出される「馴染みの語」の多くは、いわゆる「国際共通語彙」*Internationalismen*でもあろう。これは例えば「多数の（多くは系統的に類縁関係にある）言語で、同じ意味で用いられた同源の語」<sup>(3)</sup>と定義され、例としてD Kultur, E culture, R kultura < lat. cultura; D Sport, F sport, R sport < E sport が挙げられている。<sup>(4)</sup>日本語でも正書法・発音など語形に少し問題があるが karucha, supotsu は共通と見なすことができよう。D Hotel, E hotel, F hôtel, I hotel, S hotel, J hoteru; D Oper, E opera, F opéra, I òpera, S ópera, R opera, U opera, J opera など典型的な例であろう。「国際」は「言語間」と訳すこともできよう。このタームが言語学の分野で定着したのは割合最近のことであり、旧東ドイツの方が先行していたように思われる。大体六十年代頃から文献に登場

(2) WANDRUSZKA, Interlinguistik

(3) LEXIKON, S. 104

(4) D ドイツ語, E 英語, R ロシア語, F フランス語, S スペイン語, I イタリア語, J 日本語, U ハンガリー語を示す。

するようである。この術語の定義などについては、後で取り扱うことにする。

元来、共通語彙は同系統言語間では語源的共通性が一つの要因であるが（例えば英・独では father/Vater, hand/Hand, land/Land, bring/bringen, in, under/unter）語源的に同一でも、歴史的経過により著しく語形や意味が変化している場合には、一般人には共通性が感じられなくなるであろう（eight/acht, thank/danken; town/Zaun, tide/Zeit）。もう一つの大きな要因は相互借用であるが、国際化という観点では今日このファクターの方が重要である。もちろん「系統的に類縁関係」にない言語間では、もっぱらこの借用によって。こうしてギリシア・ラテン語由来の多数の語を初めとして、様々の語彙が、ゲルマン、スラヴ語派、またラテン語系の多くの言語にもたらされ、さらにヨーロッパ以外の諸言語にも共有されるようになった。上例のスポーツ、オペラは日本語でも馴染みの語である。今後、国際交流の進展とともに、予想以上に広い範囲で、語彙の共通化が進むかもしれない。それは相互理解や外国語学習のためには有利な状況でもある。つまり語彙の面では、基本的な構造語・形式語と基本語彙を学習すれば、より高度なレベルでは案外、共通性により理解が容易という状況にあるわけで、比較的少ないエネルギーで数か国語の学習が可能なることを暗示している。因みに英語が共通語として有利なのは、文法の簡素化・合理化と並び、ゲルマン系語彙に多数のラテン系語彙を統合した点に多くを依存しているといえる。従って、英語圏文化依存度の高い語法を避けるならば英語は国際補助共通語としての適性のある程度具えているといえる。<sup>(5)</sup>

他方、国際的に共通の語彙単位も、それぞれの言語にとっては原則的には、いわゆる外来語 *Fremdwort*, 借用語 *Lehnwort* である。これまで外来語は、それぞれの言語で単独に考察・議論の対象となってきた。特にドイツでは外来語は国語純化との関連で多大の関心が払われてきた。しかし、中世の騎士文化の時代の借用にせよ、フマニズム時代のラテン語借用にせよ、十七・八世紀のフランス語からの借用、そして戦後の英語からの借用にせよ、すべてドイツ語に限定される借用ではなく、他の諸言語でも観察されるヨーロッパ的現象であった。これまでは、この観点が見過ごされてきたわけで、BRAUN はこの修正の必要性を強調している。<sup>(6)</sup>特に現代のヨーロッパ言語状況を見ればそれは当然であろう。

一方、今世紀の前半ごろから翻訳などの実践から、2言語間の共通語彙が比較検討され、特に形態上は共通の語が、かなり異なった意味を持つ点に関心が向けられてきた。というのは外来語は原語と全く同じ語形（発音が完全に一致することは少ない）で摂取されるとは限らないし、意味もしばしば等価ではない。また借用後の意味変化・発展のために、様々な誤解が生じる可能性がある。わが国の外来語にも、しばしばこのような現象が観察されるが、特に英語系外来語に見られる二次的借用、いわゆる和製英語は誤解の主役でもある。

(5) 上野；世界言語概説 上巻；BODMER；SCHELER など参照

(6) BRAUN (1990), *Internationalismen*, S. 14

このような現象は普遍的にみられるものである。すなわち同じ、または類似の語形の語がそれぞれの言語で、全面的であれ、微妙にであれ、異なった意味で用いられることは、しばしば観察されるのである。この現象は「フォザミ」*faux amis, false friends, falsche Freunde* すなわち「偽の友」と称され、戦後特にヨーロッパ諸語間での研究が盛んに行われてきた。<sup>(7)</sup>このフォザミは元来、ある2言語間の関連で捉えられてきたものであるが、国際共通語彙の関連でも、これが観察される。すなわち幾つかの言語で、同一・類似形態の一見、共通語彙に属すると思われる語が、意味的に、様々なレベルで相違——意味の一部が共通ということもある——するケースが見られる。これは相互理解を深めるどころか、誤解を増幅させることになりかねない。うっかり国際的に全て「共通ではないか」と判断する可能性がある。<sup>(8)</sup>このようなアスペクトは、外国語理解の際はネガティブな干渉となるから、十分な配慮が必要であるが、全体的にみて国際的に共通の外来語ないし国際共通語彙は適切な記述方法によれば、特に国際的に重要な役割を果たしている諸語の語彙習得を、有利に展開する可能性の方が大きく、多面的かつ積極的に利用すべきであろう。

## 2 言語間語彙論研究の理論と方法

「国際共通語彙」なる語はドイツ語圏では、まず旧東独で1960年代ごろから使用され始めたと思われる。詳細は分からないが、手元にある文献では *FREMDWÖRTERBUCH* (1966) が最も古い。因みにこの辞典の編集は1962年に終了している。一方、西独版の正書法 *DUDEN 1* は1968年の16版では、この意味は未収録で1973年の17版で初めてこの説明が加わる。

現今では「国際共通(単)語」の意味での *Internationalismus (Pl.-ismen)* なるタームは *DUDEN DGW* (1977) を始め、*KLAPPENBACH* (1973)、*BROCKHAUS-WAHRIG* (1981) の代表的辞典を初め、ほとんど全ての主要辞典に収録され、言語学の用語とされているが、これは一般的にも知られていると思われる。「いろいろな文化語に現れる同じ意味で、同じか類似の形の語」(*DUDEN DGW*)、「翻訳しないで理解できる国際的に用いられる語」(*KLAPPENBACH*) などと定義され *Demokratie, Atom, Charakter* などが例示されている。後者は旧東独の *FREMDWÖRTERBUCH* と共通である。もっとも、ここでは *Auto, Radio* が例示されている。

言語学術語辞典では、目下のところ旧東独の簡便な言語学辞典 *LEXIKON sprachwissenschaftlicher Termini* (1985) にのみ収録されていて、この定義は先に紹介

(7) 例えば *KLEIN;GOTTLIEB;WANDRUSZKA, Falsche Freunde* などの研究がある。この術語については *KNOBLOCH, BUSSMANN* 参照。日本語と中国語の間でも類似の現象がある。日本語の「外人」、「汽車」、「行事」はそれぞれ中国語では「他人」、「自動車」、「行動、交際、対処」を意味するらしい。フォザミの類である(文化庁『中国語と対応する漢語』東京 1981による)。

(8) これについては本稿5及び注③を参照されたい。

したが、<sup>(9)</sup>以上の一般辞典の定義と同趣の、大まかなものといえよう。因みに BROCKHAUS-WAHRIG はこれと同趣である。ところで西独の小型言語学辞典 BUSSMANN (1983) には、この見出語は収録されていない。これは単なる偶然というより、言語学の専門分野で、それほど注目されていないからであろう。それは何より、このテーマ、現象は従来の言語学研究部門では、様々な部門の周辺に属するものとして取り扱われ、総合的に捉えられることがなかったからであるという。いわば学際的領域にあったためである。<sup>(10)</sup>(1960年に開始された本格的な言語学術語辞典の KNOBLOCH は、残念ながら最近やっと f 項に達したのみである。)

一般書では AGRICOLA 他編の *Die deutsche Sprache* (1969, S. 252) が「外来語借用」の最後にこれを説明しているのが注目される。そこには「同一か、大体同じ形で、大抵はラテン・ギリシア語根に遡り、幾つかの(ヨーロッパ)言語で同一の意味で用いられる語」と定義、Auto, Radio を挙げている。ここには、さらに正書法、発音、また意味の相違について概説を試みている。一般的な語彙論では SCHIPPAN (1984, S. 280) が「借用」の項目で、この概念に触れ「国際的に使用され、形態的・正書法的構造は摂取言語に適応され、幾つかの言語で同一の意味で、しばしば術語として用いられる語」と定義し、さらに「大抵はラテン・ギリシア語の形態素で形成されている (Thermodynamik, Mikroelektronik, thermonuklear)。しかしまた、ある言語に由来し史的経過により国際的に用いられるようになることもある。例えば Bourgeoisie, Alkohol (arab.), Soldat (ital.), dt. Theater—engl. theatre—franz. théâtre—russ. teatr」と続けている。この後フォザミの問題が指摘され、また今日大抵の言語で国際共通の専門術語が用いられているとされ、言語学の Syntax, Morphologie, Semantik, Verb, Substantiv が例示されている。また別の箇所でも「すべての領域での国際的な交流活動により、特に19世紀以来、国際的に用いられる語彙、国際共通語の成立を見るに至った。……19世紀の資本主義の経済的・政治的發展により、18世紀末・19世紀初頭から特にフランス語・英語の語彙、20世紀初頭からはアメリカ英語が借用された。政治用語の大多数は Revolution……のように英・仏語に由来する。工業分野では英語が摂取された。自然科学・技術の専門語を占めている国際共通語彙の数は非常に多い」(ib. S. 227) とコメントしている。

ところで、ここに示されているような比較的大まかな定義でも、一般的な研究には支障はなく BRAUN もこのような定義で済ませている。<sup>(11)</sup>しかし総合的・徹底的な研究のためには、この概念は精密化されなくてはならないであろう。

SCHAEDER, Versuch (S. 38f.) は上述のような一般的な定義を紹介した後で、これらを総合して術語「国際共通語彙」について以下のような所見をまとめている。

(9) 注 (3)参照。

(10) INTERNATIONALISMEN, S. 7; BRAUN (1990), S. 17 など参照。

(11) BRAUN (1978, 1986, 1990)

1. 言語学のタームである。
2. 一定の性質を有する語または語彙素 *Lexem* である。
3. さらに一定の性質とは
  - a これらの語は幾つかの（あるいは多数の／様々の）言語で用いられ、これらの言語は大抵系統的に近親関係にある。
  - b これらの語は同一か類似の意味を持ち、加えて同一か類似の語形を有するか、あるいは音声的・文法的・正書法的に多少の異同がみられるが、翻訳しないで理解可能である。
  - c これらの語はある言語から借用されたか、ラテン語かギリシア語の、または両者の形態素から造語の手段で形成されたものである。
4. ドイツ語の例：Demokratie, Atom, Charakter, Kino, Container, Zivilisation, Kultur, Sport, Radio, Taxi, Ökonomie, Republik, Bourgeoisie, Etage, Mikroelektrik, Geriatrie

このような所見から、彼は幾つかの疑問を提出している (ib., S. 39ff.)。

1. 国際共通語彙は名詞に限られるか、また語群も見られるか。
2. 幾つの言語で共通でなければならないか。少なくとも1言語は異系統に属するものでなくてはならないのではないか。系統的に同一の語派で見られる表現はロマンス語、ゲルマン語、スラヴ語内での共通語ではないのか。国際共通語ではなくて、ヨーロッパあるいはインド・ヨーロッパで共通ということではないか。
3. 同一語類への所属以外に意味、正書法、発音はどのような条件を満たさなくてはならないか。
4. 意味、正書法、発音の諸言語における一致の程度の問題。
5. 全システムティックな観点からの必然的な一致と許容されうる逸れの問題。

もちろん、これらの問題点の検討は、そう容易なものではない。ここでは2. に関してヨーロッパのゲルマン語、ロマンス語、スラヴ語のそれぞれの共通語——これは系統的な一致であるが——の例が示され、これらは除外されることが暗示されている。当然、ヨーロッパで考えるならば、少なくとも以上の3語派で共有しなくてはならないであろうし、現代の国際状況を見れば、非インド・ヨーロッパ語族の言語での共有が前提となるかもしれない。この点で日本語との共有は一つの標識となりうる。また、3. については意味・正書法・発音の一致のマトリックスが示され意味と正書法・発音の両者または一方との一致が必要であることが示されている。意味が同一でも形態が異なれば条件を満たさない。2言

語間での借用を中心とした外来語・借用語では、いわゆる翻訳借用がしばしば論じられるが、私見によれば、国際共通語でもこれを導入する可能性はないわけではないが、ここでは除外されている。また形態が同一の場合でも意味が異なれば除外される。<sup>(12)</sup>これは、いわゆるフォザミであり、一部は国際的ないし言語間同音異義語である。4. と 5. は差し当たり問題提起にとどまっている。

ここで補えば、1. に関してはやはり名詞が圧倒的に多数を占めるが、形容詞 (aktiv, attraktiv, social), 動詞 (start, spurt), 語群 (do-it-yourself) などの可能性が推定できる。学術テキストに登場するラテン語表現なども語群の例とされよう。形態の一致は「呼応」*Kongruenz*, 意味の一致は「等価」*Äquivalenz* と称されているが、4. と 5. はこの問題に関わるものである。

SCHAEFER, Versuch は続けて、国際的共通語彙の、それぞれの諸言語での具体的現れである *Lexem* 群の上位に *Interlexem* すなわち「言語間語彙素」ないし「国際共通語彙素」とでも訳すべき概念を抽出している。同様に *Intermorphem*, *-graphem*, *-phonem* なる言語間レヴェルの概念を対応させている。

さらに、精密な定義は、言語間語彙論とメトデーについて、すなわち研究範囲の設定、史的アスペクト、言語間体系の記号レパートリの形態と意味、言語間辞書の諸問題にわたって考察を試みた VOLMERT, *Interlexikologie* に見られる。彼は、ここで言語間語彙論研究に関して10項目のテーゼを設定するが、これは、とりわけ研究の展開にとって重要な諸相を示唆しているように思われる。その要点は以下のようなものである。

1. 国際共通語彙は同一か、ほぼ同一の意味内容を示す同一か、ほぼ同一の表現単位の抽象である。従って、それは言語間体系 *interlingual. System* の記号的単位 *zeichenhaft. Grösse* で、その各言語の表現は「教養層話者」*bildungssprachlicher Sprecher* により、直観的に〈等価〉の言語記号とみなされ、言語間コミュニケーションに使用されうる。

ここで問題になるのは「教養層話者」なる概念であるが、これは具体的に少なくとも、3言語に通じている——ただし特別な言語学的専門知識は要求されない——人々を想定している。また、言語間体系には言語間言語 *Interlangue* というタームが提案されている。

2. 国際共通語彙は、言語間体系 *Intersystem* の様々のレヴェルの記号単位を表すすべての術語の上位概念と解される。

(12) ただし BRAUN/KRALLMANN による *Inter-Phraseologismen* の研究があり、これは結合形式と意味が共通な慣用句を取り扱っている。



具体的には形態素から、語、語群、慣用句、文を経てテキストのレベルまで考慮されている。これは SCHAEIDER の *Interlexem* 等に関わる精密化である。もちろん、実際はこの中で語が中心となるであろう。言語間(共通)テキスト *Intertext* の例としては銘やモットーが考えられている。

3. 共通語彙研究は先ず、そして特に共時的研究である。

もちろん、これらの比較可能な「等価の記号」は、通常「歴史的な貸与・借用プロセス」の結果、すなわち「接触言語間での一度ないし数度の借用」によるものであるが、各言語の比較される語が、ある時点で等価の意味を示す場合にのみ、国際共通語彙のコンセプトが適用される。共通の意味を示す時期が異なれば対象とはならない。主として現代が中心。

4. 比較される言語は少なくとも3言語が必要で、そのうち少なくとも1言語は系統的に異なった語派、語族に属さなくてはならない。

これは、系統的・語源的な当然の一致を除外する。SCHAEIDER の疑問2. にも関連する。

5. 共通語彙は文法的関連でも比較可能な *vergleichbar* 状態を示さなくてはならない。

「比較可能」な「文法的関連」とは主として語類が同一ということが想定されている。もし意味に依存する語群・句などを考慮すれば、結合形式、シンタクスの結合のレベルにも適用できよう。

6. 接辞や造語法に関して語形が相違する場合、少なくとも基幹形態素 *Grundmorphem* が同一か、ほぼ同一の形を示すこと。

7. 特に系統的に同一の諸言語では、共時的にみて実質的に国際的共通語彙に属するか、国際的コミュニケーションの記号とみなされるかが認定基準となる。

8. 言語間語彙論研究では、正書法を出発点とするが、発音・発音と正書法の関連にも留意する。

これは、一般に言語間/国際的コミュニケーションでは文字言語を媒体としているという実情も考慮されている。特にこの傾向は、専門語彙などでは強く、音楽・映画・流行・ス

ポーツなどのマスコミ分野、また商業広告では弱いとされている。

9. 言語間語彙論は多言語専門語辞典編纂の代理はできないし、また、語源研究や言語史的研究を無視することはできない。それは従来の外来語研究のオールターナティブと解される。従って一般語 *Gemeinsprache* の語彙研究に重点をおく。

語源研究・借用プロセスの史的的研究は「言語間(共通)語彙」*Interlexikon* の諸単語の説明や理解のための背景として必要と考えられている。もちろん専門語彙については各分野での特別な研究が想定されている。

10. 国際共通語とみなされるためには、少なくとも1意味素 *Semem* が共通であること。

これは語には、しばしば複数の意味が存在するが、共通単語のそれぞれに同一の複数の意味が平行するとは限らないので、その様な場合の基準である。

以上の10項目は、もちろん完璧というわけには行かないであろう。しかし現段階では、この種の研究のための十分満足できる客観的な基準・視点を示しているものとして受け入れることができよう。

### 3 ヨーロッパにおける国際共通語彙

前章で既にいくらかの国際共通語彙の例はあげたが、ここで今日のヨーロッパの概況を紹介しよう。

BRAUN は1978年以来このテーマに重点をおいた研究結果を発表しているが、その最近の成果は INTERNATIONALISMEN に収められた BRAUN (1990) : *Internationalismen—Gleiche Wortschätze in europäischen Sprachen* である。この INTERNATIONALISMEN にはさらに VOLMERT, *Interlexeme* によるヨーロッパの6言語の辞典のf項の語彙比較, GNUTSCHKE 他による演劇用語の調査研究の成果を取めているが、以下 BRAUN を中心に、さらに他の研究結果を参考に、また、これ以外の多言語辞典類からの例なども補い、欧米言語文化圏での国際共通語彙の概要を伝えたい。これは、とりあえずは、いわば欧米文化圏共通語というべきものかもしれないが、次章で日本語の場合を補ってみると、欧米文化圏外でもかなりの共通性がみられることが推定できる。

BRAUN (S. 16f.) は独・英・仏・伊・西の5か国語について、まず政治・芸術・技術・文学・ダンス・飲物の6分野について5語づつの共通語例を挙げている。これらは国際的

な交流により、語彙の共通性も高い分野というわけである。以下にドイツ語例のみを引用するが、英・仏など他の言語に通じている場合も容易に理解できるであろう。

- (1) Demokratie, Nation, Parlament, Partei, Politik  
 Aquarell, Graphik, Ikone, Museum, Plastik  
 Dynamo, Instrument, Maschine, Motor, Technik  
 Ballade, Drama, lyrisch, Text, Literatur  
 Bolero, Polka, Rumba, Swing, Tango  
 Grog, Kaffee, Likör, Tee, Whisky

もちろん、democracy, démocratie, democrazia, democracia ; tea, thé, tè, téのようにスペルの僅かのヴァリエーション、発音のかなりの相違は許容されることになる。ラテン・ギリシア語系が多く、その他英語、仏語、西語、伊語などが原語である。ここに、すでにかなり日本語でも共通の語が含まれているが、これについては次章で扱う。

このような共通語彙の量については、BRAUN (S. 17) の報告では3500から4000という。これは1巻の辞典で英・独・仏に共通する語として挙げられている数である。ここで比較されているロマンス語の伊・西2言語については、仏と同系統でもあり共通例が多いことが容易に推定できる。一方英・仏両語の共通語彙は50ないし60%に達するとされるが、これは主として英語がラテン語から平均25%、フランス語から30%強の語を借用したことによる。<sup>(13)</sup>他方独・英/独・仏間のみ共通語もあるが、しかし国際的には共通しないので、広く共通する語彙数は当然低くなる。それでも一般の辞書で上掲の数がみられるとすれば、やはりかなりの共通語があるといえる。

ところでドイツ語のこれまでの問題点は、国語純化的操作、すなわち外来語を翻訳する傾向・好みが強かったことで、Moment/Augenblick, Universität/Hochschule, Revolution/Umwälzungなどは今日まで、ときには意味の区別を伴いながら用いられている。もちろん奇妙な訳語は消失した。しかし現代でも注目される例として、テレビに対する Fernsehen があり、BRAUN (1986, S. 342) によると、これはヨーロッパではデンマーク、ノルウェーぐらいで、他では世界的に見ても television 系が用いられているという。もちろん、今日ではこれは幸、ドイツ語でも孤立的例ではある。例えば Fernsehen の手本となった Fernsprecher は今日官庁語を除いてほとんど用いられず Telephon/Telefon に代えられている。(日本語の「電話」は健在であるが、「テレフォン」も知られている。) また外国人が集まる駅などの案内所が Auskunft では不親切であるので、最近では主要な駅などでは

(13) BRAUN (1990), S. 29 は、ラテン語からは22-28%、フランス語からは28-38%という数を挙げているが、これは SCHELER などによっている。なお注(5)参照。

Information になっている。もっとも、いわゆるピクトグラムも広く普及している。

語は単一の意味を示すことは希であり、それぞれの言語の共通単語が異なった意味内容・範囲を示すことは、また広く観察されるところである。前章のテーゼ10によれば、この様な場合、最低1意味素が共通であれば、この意味に関して共通語彙とみなされることになる。例えば E essay や F essai は「エッセイ」以外の意味を持つが D Essay にはこの意味しかなく、これらの共通語彙では、この意味素のみが考慮されることになる。gag や rock など英語では劇場の「ギャグ」や音楽の「ロック」以外の意味があるが、国際共通語で問題になるのは、この分野の意味素に限定される。このような側面は、この種語彙の所属分野を考慮した、事項別・概念別記述、いわゆる名義論的 *onomasiologisch* なグループ化により比較的容易に明確化できる。BRAUN (S. 19ff.) はこの様な観点から、さらに単位、楽器、モード、植物、建造物などの例を挙げている。

- (2) Gramm, Hektar, Kilometer, Liter, Meter, Millibar, Volt, Watt  
Balalaika, Flöte, Gitarre, Gong, Harfe, Klarinette, Mandoline, Trompete,  
Violine  
Flannel, Gabardine, Nylon  
Anemone, Aster, Dahlie, Krokus, Tulpe  
Balkon, Garage, Hotel, Kapelle, Mansarde, Museum, Theater

さらに動物については、良く知られている家畜類は国際共通語ではなく、各言語独自の語で表現されるが、いわゆるエキゾチックな動物はインターナショナリズムであることを指摘、このアスペクトは他の分野についても共通し、一般にヨーロッパ外からもたらされたような対象・事物には国際共通語彙が用いられるとしている。このような動物には次のような例が見られる。

- (3) Büffel, Elefant, Gorilla, Känguruh, Krokodil, Lama, Pinguin, Tiger, Zebra

これに対して「馬、犬、鶏、鳥」などは英・独・仏で異なる。この例外は「猫、鼠」とされる。食物・植物でもこの傾向が見られる。

次いで専門語からの影響とされる語彙が紹介される。

- (4) Dativ, lyrisch, Barock, Oper, Dogma, legal, Nation, exportieren, Globus, Charakter, Virus, addieren, Mechanik, Element

学問名もしばしば国際的に共通である。

(5) Geographie, Mathematik, Pädagogik, Psychologie, Theologie

さらに多数の一般的な学術概念が共通語彙に属する。

(6) aktiv/passiv, defensiv/offensiv, deduktiv/induktiv, explizit/implizit, individuell/kollektiv, legal/illegal, objektiv/subjektiv, praktisch/theoretisch, qualitativ/quantitativ, sozial/asozial

このような例語は容易に追加できるものである。

固有名詞の、いわゆる *onomastisch* な語でも多数の共通例がみられる。月の名——週日名は共通ではない——、国名、国民名、国名形容詞、大陸名、天体（例えば Mars）、宝石類（Diamant）、気質（melancholisch）など。固有名詞由来名詞では

(7) Grog, Boykott; Echo, Hygiene, Erotik, Adonis; Bakelit, Diesel, Sandwich; Derby, Gobelin, lynchen, Panik, röntgen, Sadismus, Saxophon, Volt, Watt; Don Juan, Don Quichotte

などが共通で知られている。

BRAUN (S. 26f.) はさらに国際共通同音異義語 *Inter-Homonym* について触れが Service: 「サーヴィス」, 「サーヴ」(テニス)や Toast: 「乾杯の辞」と「トースト」, Legende: 「聖人伝」と「記号説明」などの例を挙げている。この場合、言語によってはスペルのヴァリエーションなどで同音異義を避けることもある (Golf 「ゴルフ」, 「湾」は英 golf/gulf; 仏 golf/golfe)。

以上の概観が示すように国際共通語彙は、一般的に国際的交流の盛んな分野で多くなることが推定されるが、それは政治・経済、科学・技術、商業広告、各種娯楽、スポーツ、服飾流行などである。さらに食品・嗜好品、コスメティック、動植物、園芸植物なども注目されよう。これに対して、余り共通語彙がみられないのは伝統的文学や、法律関係とされている。<sup>(14)</sup>

他方文法的な面で、品詞は名詞が最も多く、これに次いで形容詞、動詞、そして副詞、ほとんど関わらないのは前置詞、接続詞、代名詞、その他不変化詞、助動詞などである。すなわち、いわゆる構造語はヨーロッパでも、一部の語族内の語源的関連は別として、一

(14) VOLMERT: Interlexikologie, S. 55

般に共通性が見られない。ただラテン語由来と推定される表現の中には、構成上共通性を示すことがある。

ところで国際共通語彙の原語で最も多いのはラテン・ギリシア系の語ないし形態素で、これに次いで英語、フランス語ということになろう。古典語系の語も英語・フランス語からもたらされることが多い。これ以外のスラヴ語、ドイツ語、そして非ヨーロッパ系の言語からの例は少ないとされている。BRAUN (S. 27ff.) の挙げる非ヨーロッパ系の言語例には

- (8) Bazar, Turban (ペルシア), Orang-Utan (マレー), Dschungel, Joga (インド), Taifun, Tee (中国), Jiu-Jitsu, Kimono (日本), Alkohol, Harem (アラビア), Banane, Oase, Schimpanse (アフリカ)

がある。またスラヴ語からは Polka, Zar など、ドイツ語からは Föhn, jodeln, Kindergarten, Leitmotiv, Lied, Nazi, Putsch などが国際共通語となっている。

VOLMERT: Interlexeme の調査は f 項だけに関するものではあるが、8万語から10万語を収録する辞書を母体としており、特に露語も含む点が注目される。その結果、共通語彙と目される語は Fabel, Fabrik に始まり Futurismus まで125語に及んでいる。

GNUTSCHKE の演劇用語に関する調査は、独・英・仏・伊・西・露・オランダ・ポーランドの8言語の共通語彙に及んでいるが

- (9) Akzent, Charakter, Dialog, Imitation, Komik, Pathos; Allegorie, Episode, Parodie, Rhythmus; Text, Thema, Titel, Typ; Akustik, Effekt, Film; Kostüm, Mikrophon, Studio, Video; Assistent; Repertoire; Realismus, Symbolismus; Musik, Orchester

など多数の共通語が記録されている。このような例を専門語辞典類で見出すのは容易であろう。さらに言語学関係<sup>(15)</sup>と音楽関係<sup>(16)</sup>の多言語辞典からの例を引用する。

- (10) 言語学関連: Analogie, Basis, Dialekt, Elision, Form, Genre, Humor, Idiom, Jargon, Kommunikation, Kontext, Kontrast, Lexikon, Melodie, Norm, Ode, Paradigma, Philologie, Phonetik, Psychologie, Semantik, Strophe, Struktur,

(15) NASH, Rose: Multilingual Lexicon of Linguistics and Philology. Coral Gables 1968 による。

(16) FÉDOROV/LEUCHTMANN u. a.: terminorum musicae index septem linguis redactus (Polyglottes Wörterbuch der musikalischen Terminologie) Kassel u. a. 1978 所収

Symmetrie, Symbol, syn-/diachronisch, Syntax, Telegramm, Tempo, Terminologie, Theorie, Ton, Tradition, Transformation, Typus, Variationなどは英・露・独・仏で共通である。

- (11) 音楽関係 : Arie, Arpeggio, Bass, Bordun, Chaconne, Chor, Deklamation, Dominante, Etüde, Fanfare, Finale, Glissando, Harmonie, Homophonie, Idyll, Impressionismus, Kadenz, Kanon, Kantate, Liturgie, Lyra, Madrigal, Magnificat, Menuett, Metronom, Mezzosopran, Minnesang, Modalität, Modulation, Motiv, Nocturne, Notation, Oktav(e), Operette, Orgel, Organist, Parodie, Partita, Pedal, Pentatonik, Periode, philharmonisch, Piccolo, polyphon, Polyphonie, Programm, Prosodie, Publikum, Quartett, Register, Resonanz, Rezitativ, rubato, Sartarello, Sarabande, semplice, Septett, Sequenz, Symphonie, Solo, solo, Sonate, Sopran, staccato, Stereophonie, Stil, Suite, Tenor, Terz, Tom-Tom, tonal, Tonalität, Tonika, transponieren, Triller, Trio, Tuba, Unisono, Vibraphon, Vibrato, Walzer, Xylophon, Zimbel, Zyklusなどは独・英・仏・伊・西・ハンガリー・露で共通である。

以上の概観でもヨーロッパ諸語の語彙には、かなりの共通部分があることが確認できるようである。

#### 4 日本語と国際共通語

ここで日本語はこのヨーロッパの国際共通語と、どの程度の共通性が見られるかについて概観することにする。

周知の如く日本語のこの種の語彙は、大半英語系外来語として借用される。もちろんドイツ語やフランス語などから直接入った語もいくらかあるが、ギリシア・ラテン系の語彙・形態素も英語経由でもたらされるのが普通である。もちろん日・英/日・独/日・仏間だけで共通という語もある。ドイツ語からの借用に関する例を挙げればアレルギー、イデオロギー、エネルギー、セミナー、テーマ、ノイローゼ、ビールス、レントゲン、ディーゼルなどは直接の借用であり、また国際的共通語彙に属する。しかしアイスバーン、アウフヘーベン、アルバイト、カルテ、クアハウス、ゲバルト、ザイル、ザイン、メッセ、メルクマール<sup>(17)</sup>などは日・独共通でも国際共通語ではない。このように英語以外の言語からもたらされた語が、結果的に国際共通語彙となる場合もあるが、やはり英語からの借用語

(17) アイスバーン、アルバイト、カルテなどはドイツ語の意味と異なるから実際はフォザミというべきかもしれない。

が主流である。この場合ドイツ語と日本語で共通の英語系外来語は、多くは国際共通語である。この語彙の特色として、当然また西欧諸語と同様に、国際的に共通の特定分野に集中的に分布し、また各種学術専門語語彙で共通化の傾向が強い。前章で引用した多数のヨーロッパの共通語は、日本語でも一般的にも馴染みの語彙に属するもののがかなりある。前章のナンバーに照応しながら例を挙げる。( )内は頻度が低い例、[ ]内は別形または省略可能なことを示す。最後の専門用語例では( )は用いない。

- (1) イコン；ダイナモ、マシン、モーター、テクニク；バラード、ドラマ、リリック  
な、テキスト；ポレロ、ポルカ、ルンバ、スイング、タンゴ；コーヒー、リキュール、  
ウイスキー
- (2) グラム、ヘクター、キロメートル、リットル、メーター、ミリバール、ボルト、  
ワット；バラライカ、フルート、ギター、ゴング、ハーブ、クラリネット、マンドリン、  
トランペット、ヴァイオリン；フラノ、ギャバジン、ナイロン；アネモネ、アスター、  
ダリア、クロッカス、チューリップ；バルコニー、ガレージ、ホテル、チャペル、  
(マンサード [マンサルド]、ミュージアム)
- (3) ゴリラ、カンガルー、ラマ、ペンギン、(ゼブラ)
- (4) バロック、オペラ、ドグマ、キャラクター、ビールス(ウイルス、ヴァイラス)、メ  
カニク、エレメント

学問名や、(6)で示された学術概念は一般的には外来語を用いることは少ない。アクティヴ、パッシヴ、ソシアルぐらいであろうか。固有名詞に準ずる語で月名はヨーロッパ諸語で共通例が見られるが、日本語は一致しない。国名、国民名はある程度一致するが、天体は一致しない。宝石ではダイヤモンド、サファイアなど一致するものもある。他の固有名詞に関連する次のような語(7)はかなり共通している。

- (7) ボイコット、エコ、エロティック、ベークライト、ディーゼル、サンドウィッチ、  
ダービー、ゴブラン、リンチ[する]、パニック、レントゲン、サディズム、サク[キ]  
ソフォン、ボルト、ワット、ドン・ファン、ドン・キホーテ
- (8) バザー、ターバン、オランウータン、ジャングル、ヨーガ、台風、茶、柔術、着物、  
アルコール、ハーレム、バナナ、オアシス、チンパンジー  
スラヴ語ではポルカ、ドイツ語ではフェーン[現象]、ヨーデル、ライトモティーフ、リー  
ト、ナチは知られている。
- (9) アクセント、(ダイアローグ)、イミテーション、コミック、パトス、アレゴリー、  
エピソード、パロディ、リズム、テキスト [テキスト]、テーマ、タイトル、タイプ、



コスチューム, マイクロフォン, スタジオ, ヴィデオ〔ビデオ〕, アシスタント, レポーター, リアリズム, (サンボリズム), (ミュージック), オーケストラ

(10)と(11)は専門用語であるが主なるものはアナロジー, ジャンル, ユーモア, ジャルゴン, コミュニケーション, コンテクスト, コントラスト, メロディ, パラダイム, ストラクチュア, シンメトリー, シンボル, シンタククス, テンポ, タイプ, ヴァリエーション; アリア, アルペジオ, シャコンヌ, コーラス, ファンファーレ, フィナーレ, カノン, カンタータ, メヌエット, メトロノーム, ノクターン, オペレッタ, ペダル, ピッコロ, プログラム, サラバンド, シンフォニー, ソロ, ソナタ, テノール, トリル, トリオ, ワルツ, シンバルなどである。

以上, 日本語でも, かなりの国際共通語彙があることが分かる。原語はやはりギリシア・ラテン系の語彙・形態素が目立ち, 次いで英語, フランス語, イタリア語(特に音楽)などが続く。今後さらに外交・経済, 交通, 科学技術, コンピュータ, スポーツ, 音楽, 映画などの分野で, 共通語彙化が進展するであろうが, やはり将来も当分は英語の影響が大きいであろう。その他の言語の語彙が共通語になる機会は, もちろん無いわけではないが, 英語に比較すれば非常に少ないであろう。最近の日・独・英で共通の例を挙げれば, アパルトヘイト, エキュー, オンブズマン, デタント, ペレストロイカ, トランジット, ノンストップ, テクノクラシー, バイオテクノロジー, ハイテク, コンピュータ・ウイルス, ソフトウェア, フロッピー, エアロビクス, ドーピング, トレーニング, コンパクト・ディスク, ヘヴィ・メタル, ランバダ, アニメーション, スリラー, フィルモグラフィーなどがある。

この関連で日本語で英語などを經由して国際共通語になった語が若干ある。ドイツの辞典に収録の大半は, 他の言語にも共通と思われるのでその例を挙げる。<sup>(18)</sup>

Bonze, Budo, Dan, Geisha, Gingko, Go, Haikai, Haiku, Harakiri, Hiragana, Ikebana, Judo, Kabuki, Kakemono, Kamikaze, Karate, Katakana, Kendo, Kimono, Koto, Makimono, No, Rikschā, Sake, Samurai, Satsuma, Sch-/Shintoismus, Sch-/Shogun, Seppuku, Soja〔-bohne〕, Sumo, Tsunami, Yagi〔antenne〕, Zen

いずれも典型的なエキゾティズムである。日本の生活様式・文化に関わり, かつ国際的に知られるに至った概念である。「盆栽」, 「すき焼き」, 「寿司」, 「天麩羅」などいずれ収録される可能性があろう。<sup>(19)</sup>

<sup>(18)</sup> これは現代ドイツ語の総合的辞典 DUDEN DGW に収録の語である。

<sup>(19)</sup> 1990年版 DUDEN 外来語辞典には Bonsai, Bonsaibaum, Bushido などが収録されている。

ここで日本語の共通語認定の基準についての特色に触れると、まずスペルという点ではカタカナが用いられるので、主として発音の類似と意味の一致が基準となる。しかもヨーロッパ諸語に比較して、母音挿入、l/rの区別の無視など発音の逸れも大きい。しかし、それらは許容される逸れであろう。他方スペルではないが漢字という面から見ると、発音は異なるが文字と意味が一致するという共通性が、漢字文化圏で観察されることになる。元来、国際共通語彙は文字言語を介することが多いという特色とも通じる点があり、さらに漢字文化圏の人口がかなり大きいという点と、数言語間で共通という点では注目されるが、世界的に見るならば、やはり地域的なものとして除外しなくてはならないであろう。因みに明治時代に広く行われた「独逸」、「伯林」式の転写タイプでは発音を手掛かりとして判断することになるであろう。

文字に関しては、日本語でも最近ではアルファベット略語が頻繁に用いられるようになったが、これはローマ字という点ではスペルも共通する可能性がある。もちろん語として発音されるものは原則的にカタカナ書きになる。レーダー、エイズなどの例がある。しかし、わが国独自の略語は、もちろんのこと、国際的に共通と推定されるものも必ずしも国際共通語彙には属さない。CD, VHS, WHO, YMCAなどは日・独・英で共通であるが、DNA, ECはドイツ語ではDNS, EGである。

品詞に関しては外来語借用の一般的傾向に従って、名詞がほとんどで形容詞・動詞の場合も名詞的に基幹部分が借用され「～な、～する」などが付される。まれに語群（例えばアブ・トゥ〔ツ〕・デートやドゥ〔ー〕・イト・ユアセルフ）も借用されることがある。

なお、国際共通語彙の基準では、共通の概念も同一・類似形態が伴わなければ、共通とはされない。しかし欧米諸語で共通語彙であるものが、日本語では意味・概念のみが共通と思われる場合がかなりある。翻訳借用のような観点もとりいれる必要があるように思われる。例えば「デモクラシー」も知られているが一般的には依然として「民主主義」であろう。

## 5 その他の問題点と展望

以上、国際共通語彙研究の方法・基準などについて、さらに具体的なヨーロッパ諸語の共通語彙、日本語とこれらの国際共通語彙との関連について概要を述べたが、基本的な理論などはドイツ学界でのコンセンサスを紹介したものである。なお、ヨーロッパ以外の領域にまでこの概念を適用しようとすれば、さらに同一または類似のスペル、発音の基準と逸れの程度や、<sup>(20)</sup>比較される言語の範囲などが問題になる。もちろんヨーロッパだけでも

<sup>(20)</sup> 日本語に同化された発音は、西欧の原語発音からは、しばしば、かなり逸れているとか、スペルは比較できないという問題がある。4では発音が逸れる場合も類似と判断したが、逸れに規則性があれば許容できるであろう。

60—70の言語があるとされるが、<sup>(21)</sup>これらの言語をことごとく、共通性に関して検証することは実際のでもないし、また必要でもないであろう。さらに、主要言語や、いわゆる公用語のレベルを見ても、全てを考慮することは容易ではない。実際的には先の3言語という基準に依拠し、その3言語が国際交流で主要な役割を果たしている言語であれば十分であろう。系統的にはロマンス諸語・ゲルマン語派・スラヴ語派のそれぞれ代表的1言語が適当であろう。仏・伊・西は系統的に共通語が多いであろうし、英は仏と50%の共通語彙があるから英は語彙的には仏と同じグループとなろう。とすれば例えば、英(仏)、独、露が共通し、これに少なくとも1非西欧語または非インド・ヨーロッパ語族の1言語が共通であれば、よりグローバルな意味での国際共通語彙と言えそうであるがどうであろう。

ところで語彙の共通化もさることながら、印刷言語で共通語が伝えられるとすれば、文字の問題も無視できない。例えばロシア語での共通語彙が一般的に不透明なのは文字のせいである。ラテン文字であれば、容易に馴染みの語が見付かるのである。世界の様々な文字については、ここで述べるまでもない。

他方、言語の性質上あるいは民族性、文化の特質などによっては、主として西欧からもたらされる国際語が必要であっても、そのままの借用が困難か、あるいは抵抗がある場合も依然として考えられる。このようなケースでは外来語借用で論じられている、いわゆる「意味借用」*Lehnbedeutung* や「翻訳借用」*Lehnübersetzung* も考慮する必要があるだろう。先にも触れたように日本語の場合も、ヨーロッパ諸語の共通概念がかなり意味借用、翻訳借用の形で借用されてきたし今日もその可能性がある。学問名、学術概念は一部、中国語からの借用もあるが、明治時代以降、そのような手段によって形成されてきた。「社会」、「自由」、「自然」、「民主主義」、「摩天楼」などを経て、最近の「冷戦」、「緑の党」などに至るまで、日本語には外国語の影響によって形成された語が多数ある。<sup>(22)</sup>また「銀行」が本来の金融機関から転じて「血液銀行」などと使用されるが、この意味の変化ないし借用は比較的最近の例であるが、国際的にも共通の現象であろう。従って人類に普遍的な基礎的語彙とは異なるレベルで、国際交流から発生するに至った共通概念・意味は存在するであろう。一般に複合的な意味構成が平行する場合、国際的に共通で使用される実際の状況があれば共通概念とできるであろうが、これらについては国際的共通語彙論で、なお詳細な検討が必要であろう。

さらに既に触れたが、意味に関しては、いわゆるフォザミの問題がある。フォザミについては本稿では詳細を論じなかったが(これに関しては別の機会に報告する予定である)、やや細かい問題がある。ひとつには3言語以上で比較されるために、対語が一部言語間で

(21) 田中克彦・ハールマン『現代のヨーロッパ言語』 東京 1985による。

(22) CARSTENSEN, S. 213ff. はこの種の英語の影響で形成された *Gehirnwäsche* (E brain washing)「先脳」、*Gipfelkonferenz* (E summit conference), *kalter Krieg* などの多数のドイツ語例を挙げているが、これらの例は国際的に共通といえよう。

フォザミ、他では共通という場合が起こりうる。また一般的に比較される対語が複数の意味を有する場合、一応1意味素が共通であれば共通語彙とされるが、実際は同一または類似の形態の語が、全く異なった意味を持つ本来のフォザミと同じような問題を引き起こしてくる。すなわち、ある語の全ての意味素が対語にもあると判断する危険性があるからである。こうした例として Akt, Aktie, Aktion, aktuell, Appartement, eventuell, Figur, Kaution, Konkurrenz/konkurrieren/Konkurs, Plakat, Promotion, Prospekt, Spektakel, Station, sukzedieren, Technologie などが挙げられるが、これらの共通ないし類似語形のギリシア・ラテン語系の語の意味構造は独・仏・英で完全には一致しない。<sup>(23)</sup>

ところで言語間語彙論の重要な課題は、主要な国際文化交流諸語の一般的通用語彙を比較・整理し、国際共通語彙の辞典を編纂することであろう。それは、事項・概念別とアルファベット順配列を組み合わせた構成をとるのがいい。それは事項別配列によって、意味の揺れ・変動、部分的相違などは、かなり避けられるからである。そして主要国際通用語の対語が併記されなくてはならない。当然、完全なフォザミは収録されないが、一部の言語間の場合は注記をそえて収録することになろう。もちろん、このような共通語彙辞典は、各専門分野の多言語術語辞典などに代えることは出来ない。術語辞典は共通語彙ではない術語も網羅し比較対照しなくてはならないであろう。国際共通語彙辞典は、まず一般的通用語に関して作成されるのが相応しいが、それは今日の国際交流の語彙の集積として、現代国際社会の営みの反映として、様々な観点からの興味深い資料となるが、さらに実用的には一般の国際言語交流・外国語習得などの補助手段ともなりうる。なお、国際社会の変動に応じてこの種の資料は、絶えず改訂が必要なことはいうまでもない。

## 引用・参考文献

一般的辞典、本文・脚注で明示した引用・参考文献、日本語の外来語に関する参考文献で拙論「現代日本語におけるドイツ語系外来語の概要」文献表で記載したものは略する。

上野景福：英語語彙の研究 東京 1980

現代用語の基礎知識 東京 1991

国立国語研究所：外来語の形成とその教育 東京 1990

(23) 例えば D aktuell は E topical, current の意であるが、E actual には D tatsächlich, wirklich の意味がある。D eventuell と F éventuellement は「ひょっとしたら、場合によっては」を意味するが E eventually には「遂に」の意味もある。D Konkurs は今日「破産、破産手続」を意味するが、F concours は「(人の) 集合、協力、競争」の意であり I concorso, S concursus も同趣、しかし E concourse には「競争」の意はなく(これは普通 contest であろう)、さらに「ホール」などの意がある。R でも同系語は「競争」と「債権者会議」を意味するらしい。R は第二の意味でドイツ語と関連はあるが、共時的には意味は異なると解される。従って D のみはフォザミとなる。複雑な例である。因みに日本語はコンクールとコンコース(そしてコンテスト)を共有している。同様 D Promotion は「学位授与」のみを意味し、「昇進」ほかを意味する E, F とは共通ではない。

- 世界言語概説 上巻・下巻〔市川・高津編〕東京 1956
- 世界の言語〔北村甫編〕東京 1981
- 田中宏幸：現代日本語におけるドイツ語系外来語の概要『金沢大学教養部論集23-2 (1985)』S. 89ff. 所収
- 西光義弘：言語の接触のタイプ『言語研究98号 (1990)』S. 1ff. 所収
- バケ〔森本・大泉訳〕：英語の語彙 東京 1976
- ブラッドリ〔寺沢訳〕：英語発達小史 東京 1982
- 文化庁：漢字音読語の日中対応 東京 1983
- ミッテラン〔内海・神沢訳〕：フランス語の語彙 東京 1974
- AGRICOLA u. a. (Hgg.): Die deutsche Sprache. 2 Bde. Leipzig 1969
- ALTHAUS u. a. (Hgg.): Lexikon der Germanistischen Linguistik. Tübingen 1980. 特に IX Kontrastive Aspekte, S. 633-685
- BACH, Adolf: Geschichte der deutschen Sprache. Heidelberg 1970
- BETZ, Werner: Lehnwörter und Lehnprägungen im Vor- und Frühdeutschen. In: MAURER/RUPP (Hgg.): Deutsche Wortgeschichte. Bd. 1.
- BODMER, Frederick: Die Sprache der Welt (The Loom of Language) Herrsching 1989
- BRAUN, Peter (1978): Internationalismen. In: Muttersprache 88, S. 368ff.
- (1986): Die deutsche Sprache im europäischen Vergleich. In: Muttersprache 96, S. 330ff.
- (1987): Tendenzen in der deutschen Gegenwartssprache. Berlin u. a. 1987
- (1990): Internationalismen. In: INTERNATIONALISMEN S. 13ff. (Geschenk vom Verfasser)
- BRAUN/KRALLMANN: Inter-Phraseologismen in europäischen Sprachen. In INTERNATIONALISMEN, S. 74 ff.
- BROCKHAUS-WAHRRIG: Deutsches Wörterbuch. 6 Bde. Wiesbaden/Stuttgart 1980-1984
- BUSSMANN, Hadumod: Lexikon der Sprachwissenschaft. Stuttgart 1983
- CARSTENSEN, Broder: Englische Einflüsse auf die deutsche Sprache nach 1945. Heidelberg. 1965
- DUDEN Bd. 1. Rechtschreibung. 161968, 171973, 181980, 201991
- DUDEN Bb. 5. Fremdwörterbuch. 11960, 21966, 41982, 51990
- DUDEN DGW=Das grosse Wörterbuch der deutschen Sprache. 6 Bde. 1976-1981
- DUDEN Wörterbuch der Abkürzungen. 1987
- FREMDWÖRTERBUCH. Leipzig 1966
- GNUTSCHKE (MUCHA, VOLMERT, WEYERS): Internationalismen in der europäischen Theatersprachen. In: INTERNATIONALISMEN, S. 123ff.
- GOTTLIEB, Karl Heinrich: Grundprinzipien eines Wörterbuchs der "falschen Freunde des Übersetzers". Ein Beitrag zur praktischen Lexikologie. In: Germanist. Ling. 1984, S. 103ff.
- GROSSES FREMDWÖRTERBUCH. Leipzig 1979
- INTERNATIONALISMEN=Internationalismen. Studien zur internationalen Lexikologie und Lexikographie. Hrsg. von Peter Braun, Burkhard Schaefer, Johannes Volmert. Tübingen 1990
- KIECKERS, E.: Die Sprachstämme der Erde. Heidelberg 1931
- KLAPPENBACH u. a. (Hgg.): Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache. 6 Bde. 1977
- KLEIN, Hans-Wilhelm: Schwierigkeiten des deutsch-französischen Wortschatzes. Stuttgart 1982
- KNOBLOCH, Johannes (Hg.): Sprachwissenschaftliches Wörterbuch. Heidelberg 1961ff.
- LEXIKON sprachwissenschaftlicher Termini. Hrsg. von Rudi Conrad. Leipzig 1985
- MAURER/RUPP: Deutsche Wortgeschichte. Bd. 1. Berlin u. a. 1974
- MAURER/STROH: Deutsche Wortgeschichte. Bd. 2. Berlin 1959
- SCHAEFER, Burkhard: Versuch einer theoretischen Grundlage der Internationalismenforschung. In:

- INTERNATIONALISMEN, S. 34ff.
- : Das Problem der Äquivalenz. In : INTERNATIONALISMEN, S. 63ff.
- SCHATTE, Christoph : Internationalismen und "falsche Freunde" in den Lexika des Deutschen und Polnischen. In : INTERNATIONALISMEN, S. 87ff.
- SCHELER, Manfred : Der englische Wortschatz. Berlin 1977
- SCHIPPAN, Thea : Lexikologie der deutschen Gegenwartssprache. Leipzig 1984
- SCHIRMER, A./Mitzka, W. : Deutsche Wortkunde. Berlin 1969
- SCHWARZ, Ernst : Kurze deutsche Wortgeschichte. Darmstadt 1967
- VOLMERT, Johannes : Interlexikologie—theoretische und methodische Überlegungen zu einem neuen Arbeitsfeld. In : INTERNATIONALISMEN, S. 47ff.
- : Interlexeme im Bereich des Buchstabens "F". In : INTERNATIONALISMEN, S. 95ff.
- WANDRUSZKA, Mario : "Falsche Freunde". In : ZfrzSpr. Beiheft NF 5
- : Interlinguistik. Umriss einer neuen Sprachwissenschaft. München 1971
- : Die europäische Sprachengemeinschaft. Tübingen 1990
- : > Wer fremde Sprachen nicht kennt... < Das Bild des Menschen in Europas Sprachen. Darmstadt 1991 {*Geschenk vom Verfasser*}
- WENDT, Heinz F. : Sprachen. (Das Fischer Lexikon) Frankfurt a. M. 1970